

## 05

# 設計演習 I B

## POST-COVID-19 のワークスペース 阪急六甲駅周辺に建つ小事業所

[担当教員]

北後明彦（教授）中江研（准教授）山口秀文（助教）多賀謙蔵（教授）

[Teaching Assistant]

鈴木滉一（A68）楠橋詩ノ助（A68）黒木孝司（A68）

### ■課題とその趣旨

猛威を振るう新型コロナ・ウィルス=COVID-19（コヴィッド - ナインティーン）は世界中のひとびとを家に閉じ込め続けている。これまで当たり前であった通勤はウィルスを媒介する危険な行為として忌避され、テレワーク、在宅勤務が叫ばれている。朝夕の移動の煩わしさから逃れられるものの、生活の場に就業時間／空間が入り込み、同居家族の生活はかき乱され、ひとり暮らしではリアルには誰とも会わずに日々が過ぎていく。そうした日々によって、インターネットのビデオ会議のコミュニケーションでも充分な業務、対面ではなくても済んでしまう仕事が露わになった。しかし、その一方で、やはり実際に同じ空間にいないとできないこと、いて欲しいということも強く再認識させられる。

そして、この COVID-19 の嵐を抜けた先、POST-COVID-19においては、いつ、どこで、どのように、そして“誰といっしょに”に、“誰とつながって”，仕事をするのか、はたらく場所そのものの存在の意味、在り様の再検討が始まるだろう。POST-COVID-19 の世代にとっての新しいワーク・スペースを想像力豊かに構想し、かつ実際に建設され、使われるものとしてのアリティを失うことなく、建築物として設計することが本演習の課題である。

上記の『いつ、どこで、どのように、誰といっしょに』に“誰とつながって”はたらくのか』という問い合わせに対し、『（社外・地域社会との）つながりを生む空間』をあわせもつ空間、環境の提案を行う。

### ■オフィス・ビルの概要：どのようなはたらき方をする建物か

- ・業種・業態の設定：自由に、かつ具体的に、想定すること。ただし、倉庫等の“もの”的めでなく、 “ひと”的めの空間づくりを主眼に

### おくこと。

一就業者数の想定：常時 50～60 人程度が執務するものとする。男女比、業務部門の構成などは業種・業態から適切な想定をすること。

一業種・業態を活かす建物のあり方を自分の設定にあわせて考える。

### ■敷地

- ・阪急六甲駅周辺の二か所 (B,C) の敷地から一つの敷地を各自選ぶ。
- ・敷地面積はいずれも約 600 m<sup>2</sup> (20×30m) 程度である。
- ・敷地内の高低差は現状の地形としてもよいし、平坦なものと想定してもよい。（前者が望ましいが、今年度は現地確認できなかったため。）
- ・周辺環境などの諸条件は各自の調査に基づいて適宜想定してよい。
- ・各敷地での建蔽率指定は 60%，容積率指定は 200% である。

### ■建築概要

- ・構造規模：鉄筋コンクリート造 3～4 階建て、ラーメン構造を原則とする。
- ・延べ面積：1,000～1,200 m<sup>2</sup>
- ・管理用出入口やバックヤードに連絡しやすい場所に自社や配送業者などが一次的に使用する駐車スペース 2 台分を確保すること。

課題；敷地

## 木を削り、杜を積む - 積削カグシキ皆社 -

長央尚真

テレワーキングへの移行の第一段階として、六甲の住宅街にシェアオフィスを提案する。世界を震撼させる出来事の毎に起こる常識の破壊と積層を CNC 加工機と 3D プリンターの動作になぞらえ、それらを扱うアトリエを併設し、その加工パターンを建築に落とし込む。



## つながりの連鎖 -人と人・会社と地域・自然と建物-

倉田知佳

六甲八幡神社の隣に建つファンクションデザイントラジオ事務所。スキップフロアにより機能的に分割しながらも吹抜を介して見る見られるの関係を生み出す。1階に社員食堂、屋上に菜園を設け、地域に開きながら、衣・食・住を身近に感じる空間を目指した。

### つながりの連鎖

人と人・会社と地域・自然と建物

## 設計趣旨

自然豊かな六甲八幡神社の隣に位置する建物は、その一角にファンクションのデザインを施し、建物の役割を複数する。この建物の面白さは、灰色の中層や学級研究室、様々な世代の人々が行き来する、多目的ホール、階段部に吹抜けを取り、構造などから生まれる空間感覚などである。この食堂は、みんなで集まるつながりをより深め、人間をつなぐ場所として、神社の自然を軽視し、森の中のランチバイを想起させる。また、屋上菜園で栽培の人たち、特に子供たちが参加できるように、育苗室、野菜を貯蔵する庫、イベントを開くこともできる。

社員は歩きながら通じて、食事での交流を図るなど、ユニークな空間を提供する。

スキップフロアがある構造次第により、コミュニケーションなどができる。

そして、食堂の外のところから建物内に通じる。

「食」と「ファンクション」のどちらかが勝手に勝手に、社員たる人々が共に「食文化」を感じ、「つながり」もより自然に感じることのできる空間を目指した。

（以下略）

（以下略）